

3月17日(金) 15:30~17:00 5階会議室6

プレングレス4

産褥性乳腺炎の超音波診断—助産師との連携を通して—

森本 忠興

(徳島大学名誉教授, 公立学校共済組合四国中央病院名誉院長,
乳腺外科医)

産後の乳房ケアをしていた開業助産師から、どうしてもとれない硬結があるとの紹介を受け、超音波検査をした所、左BD領域に3cm大の嚢胞があり、その他周辺にも1cm以下の小嚢胞を多数認めた。乳汁嚢胞と診断し、3cm大の嚢胞から7mlの乳汁が吸引された。その後も助産師が、問診や触診でケアの範囲を超えていると判断した事例は、すみやかに紹介され、必要な治療を行うことができている。特に、産褥性乳腺炎を疑う事例の紹介が多い。産褥性乳腺炎の経過過程は、乳管閉塞に始まり、乳汁うっ滞を生じ、感染性乳腺炎、さらに症状が進み膿瘍が形成される。外見からは疾患の鑑別は困難であるが、各々の病態により治療法が異なり、鑑別診断は重要である。これらの疾患の超音波検査所見は、乳腺腺房の浮腫像、乳管拡張像、間質浮腫像、乳汁貯留、嚢胞(膿瘍)等みられるが、超音波検査所見から病態の進行状態を鑑別できる。今回、実際の症例により、その病態と超音波検査所見を解説したい。

参加申込：第31回学術集会ホームページで受付中です。

参加費：2000円。当日、会場でお支払いください。

定員：80名程度。定員になり次第受付を締め切らせていただきます。

※ ラクテーション・コンサルタント資格試験国際評議会(IBLCE)の
継続教育単位(1.5L-CERPs)発行。受講票をお渡しします。